

学園だより

3

2014 MARCH
VOL. 180

弘前大学



特集

卒業・修了・ 退職にあたって

I 巻頭言	
弘前大学長 佐藤 敬	2
II 特集	
卒業・修了・退職にあたって	
前役員	4
卒業生・修了生	6
教職員	12
III 新任教員自己紹介	19
IV 研究室紹介	20
V けいじばんコーナー	24
VI 編集後記	26



退職、卒業を迎えられる 皆さんへ

弘前大学長 佐藤 敬

この時期になりますと毎年恒例のことではあります。平成25年度末をもって退職あるいは卒業の時を迎え、弘前大学を離れられる皆さんに、先ずもって、お礼の言葉を申し上げたいと思います。教職員、学生を問わず、皆さんは弘前大学の一員として本学の教育研究活動の発展に寄与し、その歴史を造って来られました。大変ありがとうございました。皆さんが、そのことを誇りとして、これからの毎日をお元気で活躍いただくよう心から願うものです。そして、今後も弘前大学を温かく見守り、応援していただければ幸いです。

平成25年度末をもって退職される教職員の方々におかれましては、本学の教育研究活動を力強く担ってこられたことに、深甚なる敬意を表します。また、卒業される学生の皆さんには、この弘前の地で学生生活を送り、恵まれた環境の中で青春のひと時を過ごすことができたものと推察し、心からお祝いを申し上げたいとも思います。私は常日頃、文化と歴史の香りが高く、恵まれた自然にあふれた弘前の地で仕事をし、或いは勉学に励むことのできる私たちは幸せだと信じています。そして、私自身も、勉学に励んだかどうかは別として、少なくとも物理的には、今日までこの地で過ごして来られたことを幸いに感じています。特に、今後弘前を離れることになる皆さんには、いつまでもそのことを忘れず、機会があれば、

というより是非機会をつくって弘前市と弘前大学を訪れていただきたいと願っています。

退職される教職員の皆さんの、弘前大学における勤務期間はさまざまだと推測しますが、長年にわたって、本学一筋に勤務いただいた方々も少なくないと思います。しかしながら、例え勤務が短期間であったとしても（長ければもちろんのこと）、皆さんのお仕事は本学にとって重要であり、決して欠くことのできないものでした。今年、新制弘前大学が昭和24年に設置されてから65年を経ることになると思いますが、皆さんのお一人おひとりがその歴史を担って来られたことは間違いありません。上にも述べた通り、私も学生時代から通算すると、今日までの45年間にわたって弘前大学のお世話になって来ましたが、この間のいろいろな面における大学の発展、充実の姿を見ても、多くの人々の大きな努力の成果がはっきりと表れています。間違いなく、皆さんお一人おひとりが本学の発展と充実に貢献していただきました。そのことに、心から感謝申し上げる次第です。

最近の日本社会は、経済の好転によって（一部で指摘されているように、あるいは部分的なものにとどまっているのかもしれませんが）明るさを取り戻しているようで、それ自体は大変喜ばしいことに間違いありません。しかし、本当に明るい社会を実現するためには、経済の好転を一時的な

ものに終わらせることなく、実質的なものとして確立し、しかも国民全体の幸福のために機能させていくことが理想であり、その理想に少しでも近づくことを目指して社会に貢献する人材の育成こそが、大学に課せられた大きな役割の一つであると思います。これからの社会を担っていく皆さんには、これまでの勉学の成果や人間的成長の成果の全てを駆使して、人々が幸福に暮らすことのできる社会の実現に貢献する気概を持っていただかなければなりません。そして、弘前大学はこれからも、そのような視点に立って社会をリードする人材の育成を目指していかなければなりません。特にこの度卒業される皆さんが、今後のお仕事の中で、弘前大学におけるさまざまな学修の成果を生かして活躍していただければ大変幸いに思うとともに、そのことを通して、さらに学び成長していけるよう願っています。

現在、弘前大学のみならず、我が国の国立大学は、平成16年の法人化にも匹敵する、あるいはそれ以上の規模になるかもしれない、大きな改革の流れの中に置かれています。これは、我が国が、世界で活躍する優れた人材を最大の財産とすべき国であるとの認識に基づいたもので、大学に対する社会からの大きな期待の表れと受け止めるべきでしょう。特に弘前大学においては、“世界に発信し、地域と共に創造する”姿をより一層明確になるよう追究していくことが必要であると理解しています。しかしながら、急速に進みつつある高齢化と人口減少は、我が国にとって、また特に地方社会にとって、ますます大きな問題になっており、大学にも大きな影響を及ぼしています。その流れを止めることが極めて難しいのは間違いありませんが、弘前大学の教育研究活動と、その成果としての人材育成が、地域社会の活性化に少しでも役立つものでありたいと念じています。それを主として担うのは、卒業される皆さんの役割です。

そのためには、特にグローバル人材の育成が弘前大学の重要な課題であり、海外からの留学生を増やし、本学学生の海外留学を後押しすることが求められていると認識しています。そのことを目指して、広報・国際課と国際教育センターの立ち上げや、英語コミュニケーション教育の強化と海外留学をセットにした学内カレッジ「はやぶさカレッジ」の創設、TOEIC受験料の助成、海外事

務所の開設をはじめ、さまざまな取組を実施してきました。しかしながら、それらの成果は一朝一夕に達成されるものではなく、また、大学として限られた中からの資源の投入も必要で、今後も工夫をしながら努力を続けていくことが求められます。海外からの留学生の支援に関しては、地域の方々から、公私織り交ぜて多大なご支援をいただいてきました。この点も忘れてならないことであり、この場を借りて感謝申し上げます。

従来から、教員として小中高等学校等に就職する場合を除くと、本学卒業生の主な就職先としては、地方の企業や自治体、金融機関などが上位を占めていますが、例えこのような地方の職場にあっても、これからは、ますますグローバルな視点を持って仕事をするのが求められるのは間違いのないでしょう。また、社会人としての日々の中では、これまでは必ずしも経験したことのない課題に数多く接するようになると予想されます。卒業される皆さんには、是非そのことを明確に意識していただくようお願いしたいと思います。そして、弘前大学としても、グローバル人材育成のための取組を強化することに加えて、大学の学びの中でも、学生が可能な限り多様な経験ができるよう努めていきたいと考えています。海外からの留学生を迎えてキャンパスの国際化を強めることは、広い意味での教育の多様化にもつながることです。

これらの目標に向かって、そして一方では、皆さんが築いて来られたこれまでの本学の歴史と伝統を踏まえることを忘れずに、学生、教職員が一丸となって大学改革を進め、人材こそが財産と本当に言える我が国社会の実現に貢献する覚悟です。弘前大学を去られる皆さんも、さまざまな立場から、本学の改革と発展を温かく見守り、応援して下さいよう期待しております。

最後になりましたが、この春をもって弘前大学を去られる方々が今後如何なる道を歩まれるかに関わらず、皆さんお一人おひとりのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。この原稿を書きながら迎えた新年は、最近になく穏やかなものになりました。皆さんにとっての2014年とそれ以降の日々が、この新年のように穏やかなものであり続けることを祈ります。

本当に終わりに、重ねて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

3.11 東日本大震災と 入学試験

前弘前大学副学長・理事(企画担当) 神田 健 策



私は、1984（昭和59）年11月に、それまで勤めていた北海道の北見工業大学一般教育から、しょっぱい川を渡り、みちのくの小京都＝弘前市に転居、農学部農学科に採用された。それから29年5ヶ月、本学に奉職し、この3月に晴れて退職となる。この間、2010（平成22）年2月から12年1月までの2年間、教育・学生担当理事（副学長）を担ったこともあり、教育面に関わる思い出を記したい。

一番記憶に残るのは2011年の「3.11 東日本大震災」である。この日の翌日は、本学の後期試験日であった。入学試験は大学にとって重要な行事であるので全学の教職員の全面的な協力によって実施される。入試は何事も無く終わって、当たり前である。特に試験問題などにいささかのミスも許されない。担当理事として最大の注意を払い、緊張する。当時、問題になっていたのは、ある受験生が複数の大学で携帯電話を利用して「解答」していたという事件が発覚したため、携帯の所持について、特別な配慮が必要になった。本学では、受験生に身につけさせず、個々のカバンに入れて保管させるなど、万全の体制をとることに力を注いだ。

3月11日の午後2時過ぎ、試験体制の準備が順調に進んでいることを学務部長と確認してからマスコミの取材を受けた。質問はもっぱら「携帯利用」であったが、私の方からは「不正などが起こらないように万全な体制をとりました」とコメントした。夕方と夜のローカルニュースで放映する取材だった。その際、コメントの最後に「後は天地異変が起きないことだけを願っています」と付け足して取材を終え、理事室に戻った。明日の本番を待つだけだった。

30分後の2時46分。教育・学生担当の理事室は総合教育棟の1階にあり、耐震改修を終えた頑強な建造物内にある。その建物が不気味な揺れを繰り返した。震源地と弘前は同じ東北地方とはい

え500キロ以上離れており、震度4だった。それ故、当地は大きな被害は出なかったものの、とにかく長い振動だった。理事室のブラインドが「カタガタ ガタカタ」と数分揺れ、まもなく電気が消えた。事務室で携帯電話のTVを見ることができた。小さい画面ではあったが大変なことが起きていることが分かった。私ごとであるが、弘前に来た直後、幕末に起きた南部三閉伊一揆の研究をしていたことがあったので、三陸海岸の地理に関する知識は多少あった。明治・昭和の2回の大津波の痕跡は至るところに残っており、津波被害の怖さを即座に理解することができた。言うまでも無く太平洋沿岸は想像を絶する被害に襲われた。

夕方になり日も暮れてきた。明日の試験をどうするか。実施するか否かをいつ判断するか。当時の遠藤学長と相談した。もう少し判断を待とうということになったが、停電は続き、回復の見通しが無い。弘前の3月中旬は暖房が必要であるが、それだけの石油ストーブを今から用意することは困難である。水洗トイレも使えない。他大学の状況も一部しか把握できなかった。午後7時、暗闇の中で学長と最後の相談をし、明朝7時に部局長を集めて最終判断を下すことになった。入試係では当時の大高学務部長と係員が一晩中、各地からの問い合わせに対応してくれた。受験生の悲痛な声が電話越しに聞こえる。私は「来場困難な受験生には一切の不利にならないようにするから、安心して下さい」と伝えるように指示した。

一晩が過ぎて朝7時、緊急会議を開催し、「試験実施は中止。センター試験を判定基準にする」ことを決定、ただちに公表した。一部の受験生、マスコミから「中止の判断と公表が遅い」とのお叱りを受けた。しかし、最善を尽くしたと思っている。書きたいことは他にも山ほどあるが、字数を超えた。この時の新入生はもう一年で卒業だ。この時の入試を振り返り意義ある大学生活を送って欲しい。

思い出

前弘前大学副学長・理事(研究担当) 加藤 陽 治



私は昭和62年4月に弘前大学教育学部家政学科の食物学担当教員として採用された。オーバードクター時代が長かっただけに、採用の知らせを手にしたときの喜びは今でも忘れることができない。それから27年の歳月があっという間に流れ、過ぎ去りし出来事一つ一つが忘れがたい思い出である。

教育の面では、食物学(食品学と栄養学を含む)を中心にした講義と実験を担当した。なかでも食料→食品→食物→食事の流れと、それに関わる食品加工・貯蔵、調理、献立・配膳の果たす役割を話すのは楽しいものであった。また糖度計の原理を教えるのに糖溶液だけでなく塩水や酢を使用する実験は学生の興味を引くのに大変効果的であった。理事就任(平成18年)以降、対外的な仕事が増え、学生に迷惑をかけまいと思い学部講義は担当しなかったが、食物に興味を持つ学生達に申し訳なかったという気持ちで一杯である。

研究の面では「植物細胞壁多糖類の微細構造と機能」について、果実の生育・熟成という植物生理学的な視点と食物繊維・オリゴ糖という食品・栄養学的な視点の両面から研究を進めることが出来た。これに加え在職後半は地域の農林水産物(カシス、ツルアラメ、ナガイモ、リンゴ搾汁残渣等)の高付加価値化研究にも取り組むことができた。食物学研究室で一緒に研究に携わった学部学生、大学院生、研究員、研究補助員の数は約70名であった。学術振興会の外国人博士研究員を受け入れた時期、あるいはアメリカ人の実験補助員を採用した時期は、院生にとっても大きな刺激となった。毎日の英会話の成果は、海外での学

会発表で大いに発揮できたようである。

在職後半の地域共同研究センター長としての5年間、引き続いて研究・産学連携担当理事としての8年間の計13年の間、センター専任教員の内山教授および学術情報部(現研究推進部)の職員と一緒に取り組んだ仕事も私にとり貴重な経験であった。サテライト(八戸、青森、東京)ネットワークの構築、都市エリア産学官連携促進事業中核機関、地域新生コンソーシアム研究開発事業管理法人、各種セミナー・講演会の開催および研究シーズ発表会、知的財産本部の強化、さらには科学研究費の採択率・採択金額アップに向けた基本方針の策定、そして県内の小中高生を対象として実施した研究テーマ募集型共同研究「科学者発見プロジェクト」、等々はよき思い出である。

教育学部食物学研究室の前の中庭に、春になると綺麗な花を咲かせ、大きな実をつける梅の木がある。約20年前に、これを使用して「食品学実験:梅酒造り」を課外で実践した。梅酒造りに汗を流した学生と近い将来一緒に飲むことを約束した。しかし、その約束を果たせないまま、研究室の低温室で研究室の歴史を見守り続けた一升瓶1本があった。先日の私の最終講義に駆けつけてくれた卒業生の中にその時の二人がいた。講義の後、その20年ものの梅酒で乾杯し、当時の思い出に花を咲かせたのは言うまでもない。新たな思い出である。弘前大学での思い出は尽きない。苦楽を共にしてくれた皆さんに感謝したい。

最後に、教育・研究の場を与えてくださった弘前大学に感謝すると共に、弘前大学のますますのご発展をお祈りいたします。

卒業生・修了生

人文学部



大学生活を振り返って

人間文化課程
佐藤 亜紀乃

「大学に進学して本当によかった」。私の4年間は、この一言に尽きます。日々の講義やゼミ、サークル活動、ボランティア活動、友人との時間、旅行、アルバイトに就職活動…。文字にすると平凡な大学生活ですが、見るもの、聞くことすべてが新鮮でした。あれもこれも見たい、聞きたい、知りたいと次々に欲が出て、在学中になるべく多くの事柄を吸収したいと考えました。入学当初は長く感じた4年間も、それらをすべて行動に移すととても短かったというのが今の感想です。

大学には実家から通っていましたが、在学中に留学などの海外渡航をしたわけではありません。しかし、弘前大学で得たものは数多くあります。とくに、限られた環境の中でも十分に楽しみ、成長できることに気が付きました。また、多くの出会いから様々な価値観に触れ、何より、大切な友人に出会えました。これだけ楽しく充実した日々を過ごせたのは、両親やお世話になった先生方、友人など多くの人たちのおかげであり、本当に感謝しています。

大学生活は、自分の考え方や過ごし方次第で内容が大きく変わります。後輩のみなさんには、一日一日を大切に、有意義な時間を過ごしてほしいと思います。



大学生活の思い出

現代社会課程
葛西 未季

ギリギリで弘大に合格したあの日から4年が経とうとしています。大学生活での思い出はたくさんありますが、その中でも印象的だった2つを紹介します。

まず、3年生まで電車通学をしていたことです。運行本数が少なくかつ終電が早いために、高校時代とは比べものにならないほど大変でした。終電に遅れそうになり、駅まで走ったことも今となっては良い思い出です。後輩の皆さんの中にも電車通学している人がいると思いますが、めげずに頑張ってください。4年生

になれば学校の駐車場が使えるので、それまでの辛抱です。

そしてもう1つは部活動です。私は吹奏楽団に所属し、総勢100名を超える先輩・同輩・後輩とともに活動してきました。コンクール、定期演奏会、団内アンサンブル祭りなどの行事はどれも忘れられない思い出となっています。特に人生初のリーダー職を務めたことは自信を持つことの大切さを学ばせてくれました。

大学生活は本当にあつという間です。学生のうちにしかなできないことはたくさんあると思うので、今を十分に楽しんでください。最後に、これまで私に関わってくれた全ての方々に感謝します。ありがとうございました。



4年間を振り返って

経済経営課程
佐藤 瑠理

私の大学生活は、素敵な人々に出会えた4年間でした。弘前大学へ入学するにあたり、独り暮らしではなく、朋寮へ入寮することにしました。おかげで、大学で友達ができるかという不安は杞憂に終わりました。同じ学部だけでなく他学部の友達がたくさんでき、先輩、後輩とともに毎日賑やかな生活を過ごしました。生活のほぼ大半を過ごした寮の友達は、素の自分で接することができ、信頼できる大切な友達です。

学業では、ゼミナールに所属してから、物事の考え

方を学ぶことができました。さらに、地域企業と連携して商品開発を行うという貴重な経験をすることができました。これまで学んできたことと「学生らしさ」を活かして商品開発を進めることで、机上の理論を実践しました。この経験を社会に出てから様々な形で活かしていきたいです。

大学に入って、学業、サークル、日々の生活で様々なことを経験し、少しは積極的に行動できるようになり、内面的に成長できたと思います。大学に進学させてくれた家族、指導して下さった先生方、友達、すべての方々に感謝です。ありがとうございました。

後輩の皆さん、4年間は本当に早いです。「弘前大学に入って良かった」と卒業の時に思えるように、悔いのないように過ごして下さい。



子どもが教えてくれたこと

学校教育教員養成課程
栗林 侑輝乃

4年次教育実習でのこと。小学校1年生のクラスに1日だけ入る機会があった。子どもたちは1年生ということもあり、すぐに仲良くなり、1日もあっという間に終わりを迎えた。その時のことである。子どもたちが帰り支度をすませ、教室から出る際に整理する補助をしながら、少しぼうっとして私が遠くを見た瞬間にある子どもが私に向かって言葉放った。「せんせい、どうしてそんなにさみしそうなかおをしてるの?」私は衝撃だった。その瞬間、頭の中で私が考えていたことは「ああ、あっという間だったなあ…1日だけでお別れなんて寂しいなあ…。」

読心術のごとく、その子どもは私に聞いてきたのだ。子どもが持つ力の無限さ、暖かさ、様々なものを感じた出来事であり、今も忘れられない印象深い出来事である。

子どもだけではなく、4年間本当にたくさんの人と関わる機会に恵まれた。あの子どもにとって、私との出会いは一瞬であったかもしれないが、私にとってはその出会いが一生になった。弘前に来て、そんな出会いがたくさんあったことに本当に感謝している。4月から大学生の肩書が社会人になり、教師として子どもたちとの毎日を過ごす…まだうまく思い描けないけれど、きっとこの弘前で過ごした4年間で私を支えてくれるんだろうなあ、そう心から感じ卒業できることを幸せに思う。



大学生活を振り返って

生涯教育課程
沼田 奈穂

弘前大学に入学し、早くも4年の月日が経ちました。わたしにとって、この大学生活は本当に多くのものを得ることができた4年間でした。生活のすべてが初めてに溢れ、学科やサークルではかけがえのない友人ができたのもこの大学生活のおかげです。毎日が楽しく、自分の関心のある分野を学び充実した日々を弘前大学で過ごすことが出来ました。しかし、逆に後悔した部分もありました。それは、もっと目標に向かって積極的に学ぶべきであったという事です。講義を受けて学んだことや自分で疑問

に思ったことをもっと深く掘り下げて勉強するべきでした。この後悔は4月から迎える社会人生活に十分に生かしていきたいと思います。

最後になりますが、お世話になりました先生方、本当に4年間ありがとうございました。先生方のおかげで成長出来た自分があるのだとこの文章を書きながら改めて感じています。そして、後輩のみなさん、残りの学生生活においては出来るだけ広い視野で考え行動し、目標に向かって充実した学生生活をおくってください。



大学院生活を振り返って

教科教育専攻
沖津 明日見

私は、3年間の大学院生活の中で新しい出会いをたくさん経験し、とても充実した毎日を送ることができました。

入学した平成23年の春は、東日本大震災の直後で、その上自身が他大学出身ということもあり、心細く、すぐ大学に馴染めるのだろうかという不安を抱いていました。しかし、そんな私に美術科の学生や先生方は、大学や弘前市のこと、他にも多くのことを積極的に教えて下さりました。今でも変わらないその心遣いには、とても感謝しています。また、かねてから

興味を持っていた西洋美術史を深く学ぶことができ、以前とは異なる視点から美術作品を観ることができるようになったと思います。

2年目は、ドイツのトリアー大学へ留学しました。語学の壁もありましたが、様々な文化に触れることができ、価値ある1年となりました。特に、私は西洋美術史を専門的に学んでいたため、多くの美術館等をたずね、作品を観賞することができました。

そして、昨年は修士論文を作成しながら、就職活動をするという非常に忙しい1年でした。この3年間で得た新しいものの考え方や観方を役立て、人とのつながりを大切に、4月からは、社会人(某県の教員)として、頑張っていきたいと思います。

今だからわかること

医学部医学科6年

市川 奈菜

6年間の学生生活を振り返ってみると、月並みですが、早かったというのが正直な私の感想です。ちょうど6年前の今頃、弘前大学への入学が決まりました。あの時は6年も先のことなんて全く想像もつかず、遠い先のことと思っていましたが、今思い返すと勉強と部活に追われて本当にあっという間に終わってしまいました。入学当時と比べて今の自分は成長したのか考えてみると、昔思っていたよりも24歳は大人ではないけれど、わずかながら自分でも成長を感じています。それも全て講義や部活、実習などでお世話になった先生方、先輩、後輩、そしてなにより同期の存

在なくしてはあり得なかったことと考えると、この6年間での全ての出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。6年という長い時間を一瞬のことに感じられるのは、逆に言うとそれだけ一生懸命に何かに取り組んでいたからだと思います。今は何気ない学校での一日さえも懐かしく、愛おしく感じられ、この大学生活はこれからの私の支えになるだろうとはっきり感じられます。いつの日か後輩たちに同じ気持ちを感じてもらえる手助けとなれるよう、これから社会に出てさらに沢山の人の出会い、様々な経験をして成長していきたいです。最後になりますが、先生方を始めこの6年間で出会った全ての人、そして弘前大学に感謝します。ありがとうございました。

卒業を前にして思うこと

医学部医学科6年

塩原 寛之

不安と緊張のまま受験日を迎え、雪国の洗礼を受けた入学試験からもう6年も経ってしまった。振り返ると時が経つのは早いと思うのですが、実際に体験していたその瞬間は非常に長く感じられた。というのが、今の感想である。今回、「学園だより」を書く機会に恵まれ、6年間の思い返してみた。

自分の学生生活はいつも勉強と部活と共にあった。訳も分からぬまま、準硬式野球部に入部し、そこから自分の大学生活が始まった。そんな中、初めて体験する先輩や先生方との人間関係や連日行われる練習に追われ、大学生活に対する不安を感じる余裕もなく過ごした1年

生。医学の勉強が本格的に始まり、実際に学ぶ医学と自分のイメージする医学との差に戸惑いを感じつつも、部活での役割も大きなものとなり、学問と部活の両立に思いを悩ませた2・3・4年生。実臨床の場に触れ、医師への憧れと責任感を高める一方で、後輩の力強さと成長に頼もしさを感じた5・6年生。そして、国家試験を終え、残るは卒業の日を待つのみとなった現在。

振り返ってみると自分の大学生活は人に恵まれた6年間であったと思う。友人や部活の仲間、気にかけて下さった先生方、全ての人に感謝をしたい。そして、そんな人々との出会いが、今弘前を去ろうとしている自分の後ろ髪を引く存在になるまで大きなものとなったことに驚きと嬉しさを感じながら新たな一歩を踏み出したいと思う。





大学生活を過ごしてみて

検査技術科学専攻
千葉 亮

私が期待と不安で一杯だったあの頃から、早くて4年が経とうとしています。本当にあつという間だった、というのが真っ先に浮かんだ感想でした。この短い学生生活の中で、私が一番大切にしたいものは多くのお会いです。

ひとたび大学に足を踏み入れてみれば、様々な考え、趣味、能力を持った人たちと触れ合う機会に溢れていました。そのどれもが新鮮で、私は積極的に彼らの中に溶け込んでいきました。サークルやゼミ、講義や実習などで長い時間を共有し、時には共に遊んだり

居酒屋で盛り上がりすぎたこともありましたが、こうして日々を過ごすうちに、悩みであった引っ込み思案も少しは良くなっていったと思います。それだけでなく、様々な人たちに接するうち、自分の人生に対する考え方も大きく変わっていきました。以前は、ただ普通に毎日を過ごしていればいい。そう考えていたのですが、今では人の支えとなって楽しく生きていきたいと心底思えるようになりました。

大学生活はもちろん楽しいことばかりでなく、心が折れるようなこともありましたが、それでも、良い事も悪い事も含めて私にとって一生忘れられない宝物です。たくさんの出会いが私を変えたように、皆さんが大学生活を通して一生の宝物となるような何かに出会えることを心より祈っております。



4年間を過ごして

放射線技術科学専攻
有賀 弘貴

4年という月日が流れるのは早く、札幌で受験し合格を勝ち取ったのが昨日のこのように感じています。中学生の頃から医療従事者になりたいという夢をかなえる為、縁あってこの弘前大学に入学することができました。この4年間は私にとって「一番有意義な時間」でした。

右も左もわからない状態からスタートした寮生活。仕事やプライバシー等で苦労したことが多々ありましたが、先輩や後輩、家族同然の同期がいたからこそ寮生ならではの楽しさを味わうことができました。また、

4年間大学生協にも関わらせて頂き、新入生への電話掛けの仕方、親御さんとの接し方などの基本的なことから、保護者説明会での全体プレゼン、全国の大学生との交流、3年生の時はほぼ月1での地方出張など、様々な活動を通して沢山のことを学び、成長する場を与えて頂き本当に感謝しています。

この4年間有意義な時間を過ごすことが出来たのは、周りの方々の支えのおかげです。ご指導くださった先生方、大学生協の職員の方々、同期、後輩、家族に心から感謝しています。これからも様々な人とのつながりを大切に、そしてお世話になった方々へ恩返しができるよう日々頑張っていきたいと思っています。



博士課程6年間で振り返って

保健学専攻
原田 智美

博士課程に進学する時に、修士以前の研究テーマから新しいテーマへと宗旨替えをすることになりました。まずは関連文献・資料集めから始まり、1年間の準備期間を経て受験。長期履修申請をして6年間の博士課程は、前半3年間をまるまる、関連文献を読んで研究計画を作成する作業に費やされました。研究計画が倫理審査会を通過し、ようやく調査に取り掛かれたのは4年目の冬でした。

研究内容は、地域在住高齢者の日常生活における歩行量の計測と身体活動状況の調査です。データ収集の

ために1年間毎日（爆弾低気圧の日も集中豪雨の日も猛吹雪の日も！）対象地域に通い続け、スケジュール的には忙しかったのですが、大勢の高齢者の皆さんと繰り返しお会いする中でいろいろなお話をうかがうことができ、楽しみながら行うことができました。多くの方に支えられて形にできた今回の研究成果が、対象地域のみならず広く日本中の、豪雪地に住む高齢者の方々の健康増進に少しでもお役に立てるものであれば、嬉しい限りです。

4月からは臨床に戻ります。大学院での経験を踏まえて、心機一転、今後は生まれ故郷に住む障害者や高齢者の方々のために頑張っていこうと思います。

卒業生・修了生

理工学部



4年間を振り返って

数理科学科
大山 普也

中・高とうってかわって自由度の高い大学生活は、私にとって大変であり、とても充実したものになりました。この4年間を通して自分自身とても成長できたと思えたことが主に二つあります。

一つは部活動で、私の所属していたハンドボール部は、主将がそのまま選手兼コーチをするという形でチームを運営していました。自分たちの力のみでつかみとった勝利は一層嬉しかったです。二つ目は一人暮らしをしたことです。今まで全て親にやってもらって

いた私にとって家事の一つ一つがとても大変でした。しかし、これら全てを自分一人で行ってきたわけではなく、支えてくれた方々がいました。部活動はチームメイトの皆、勉強面は先生方や同じ学科の友人、生活面は親や親戚。これらの方々の支えがなければとてもやっていけなかったと思います。今は感謝の気持ちでいっぱい、これからも人との関わりと感謝を大切にしていきたいと思っています。

最後になりますが、後輩の皆さんにはたくさんの新しいことに挑戦して行ってほしいと思います。時間は限られていますので、学生にしかできないこと、学生のうちにしておきたいことなどがあれば悔いを残さないようにやりきってほしいです。



振り返って感じたこと

物理科学科
坂本 和史

大学に入ってから4年間を振り返り、何が自分にとって大きいことだったかと考えてみると、やはり一人暮らしが始まったことだと思いました。入学してからはじめの数週間は、必要な手続きなどは全て自分でやらなくてはいけない状況になったため、色々な大学のシステムに適應するのに必死で、何も考えることができないまま生活していました。ところが生活に慣れて余裕が出てくると、その時まではあまり省みることがなかった自分の生活を、一歩引いたところからの目線で見られるようになってい

きました。初めて実家に帰ったときは、それまでは特に意識していなかった、自分の生活が他人の影響を受けながら形作られていくような感覚がして、新鮮でした。そういった、一人暮らしをしていなければ感じられなかった感覚がたくさんあり、それらを味わえたのは自分の人生にとって大きなことだと思います。

また自分のような骨惜しみしやすい人間には特に、やりたいことや気になることにすぐ取り組むように心掛けるのが大切だと思いました。どんなに面白そうなことでも、新しいことを始めたり慣れないことをするのは自分に負荷がかかりますが、そういうことに挑戦していった方が面白そうだということに気付いたので、これからそんな感じで生きていきたいと思っています。



出会いに感謝して

物質創成化学科
飯原 瑛梨

大学生活を振り返り、思い出すのは出会った人の顔ばかりです。寮や部活、学科、研究室、バイト等、様々な場所での出会いに支えられた4年間でした。

右も左もわからず入学してきた私を支えてくれたのは寮の仲間たちで、大学生活に必要な知識を先輩から同期とともに教わりました。また、寮での出会いがきっかけで高校のころから興味を持っていた部活に入部することができました。部活では高校から継続して入部する人が多い中、本当に先輩、後輩、同輩に恵まれ、

初心者として色々なことを学ぶことができました。学科の同期たちと夜通し課題をした日もありました。提出したときの達成感と喜びは今でも忘れられません。これらの経験を通して、人と協力することの大切さを大学生活でより深く学べたように感じます。

私は春から大学院に進学します。進学を決めた以上、今まで以上に学ぶことに力を入れ、個人の力に磨きをかけようと思います。数々の思い出をくれた友人たちと別れるのは寂しいですが、近い将来、再びお互いに成長した姿で出会えることを楽しみにしています。



大学生活を振り返って

生物資源学科
品野 綾子

入学当初は、自分に自信がなくて親に甘えてきた自分が、知り合いもない初めての土地でちゃんと大学生活をおくれるのかどうか、期待よりも不安が圧倒的に大きかったです。それでも何とかなるもので、4年経った今では前よりも少し強くなれたかなと思うようになりました。特に部活の存在は大きかったです。一生楽しめる大切な趣味ができましたし、大変なこともたくさんありましたが、素晴らしい経験ができたし成長できたと思います。勉強面では、元々強い思いがあって入った学科ではなかったのです

が、講義を受けていくうちにだんだんと面白さを感じていけるようになりました。毎日が充実していたわけでもないし、他の人に比べて経験してきたことも少なく、後悔していることもたくさんありますが、自分が出来る範囲で精一杯努力し納得できる大学生活をおくることができたので今は満足しています。

4月から社会人になり辛いことや大変なこともあると思いますが、4年間弘前大学で過ごし学んだことを活かし、頑張っていきたいと思います。最後に、お世話になった先生方、先輩・後輩、同期のみなさん、本当にありがとうございました。

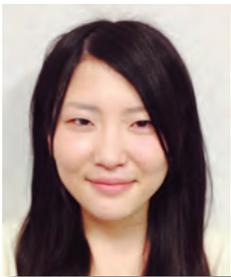
4年間を振り返って

分子生命科学科
渡邊 尚子

私が弘前大学に入学して4年経ちました。入学する前は大学で過ごす4年間はとてつもなく長いものだと思っていましたが、いま振り返ってみると非常に短く、そして充実した時間でした。入ってすぐのころはこれから始まる大学生活に胸を躍らせるというより、第一志望大学に行けなかった悔しさや自分の希望通りの進路に進めた友人たちに対する引け目といったマイナスの感情で頭がいっぱいでした。しかし今ではこの大学に入学してよかったと思います。なぜならこの弘前大学での生活を通してたくさんものを得ることができたからです。その中で私がいちばん影響を受けたもの

はさまざまな人たちとの出会いでした。友人たちや先生方はもちろんのことサークル活動でお世話になった方々や研究室のメンバー、語学研修で出会った留学生など、さまざまな年齢や立場、国籍の人と出会うことで自分の知らない世界を知り、より広い視野で物事を考えられるようになりました。

最後になりますが、一緒になって笑ったり悩んだりしてくれた友人や仲間たち、ご指導して下さった先生方、いつもの確かなアドバイスをくださった研究室の皆さんなどお世話になったすべての方々から感謝いたします。本当にありがとうございました。



大学生活を振り返って

園芸農学科
泉山 綾子

私の大学生活を振り返り、後輩へのメッセージを送りたいと思います。この4年間で振り返ると、ゼミやサークル(パラグライダー)、アルバイト、就職活動など学生生活の中で多くの人々に出会い、時には意見や主張をぶつけ合い、時には互いに切磋琢磨したことで、人間的に大きく成長することが出来たと思います。

特に就職活動においては、なかなかうまくいかず落ち込むこともありましたが、安易に目標を下げるのではなく、当初からの目標に向かってひたむきに努力し続けたことが成果に繋がったと思います。私は、就職

活動期間においては毎日朝から夜までゼミ室に籠り、企業研究および自己分析、面接対策に勤しんでいましたが、ここまでやったのだと思えたことが自信に繋がりました。希望した職種への採用に結びついたのだと考えています。もちろん就職活動に限定されることではありませんが、自分で限界と決めつけハードルを下げないことが必要なのではないかと思っています。後輩の皆さんも、後悔のないよう、限られた学生生活を全力で楽しんで欲しいと思います。

最後になりますが、私を成長させてくれた皆様へ感謝の言葉を贈り、結びとさせて頂きたいです。弘前大学へ入学して4年間、未熟者だった私がここまで成長出来たのは、ご指導くださった諸先生方や友人、家族の支えがあったからこそだと思います。本当にありがとうございました。

教 職 員



耳学問の大切さ

人文学部 教授
長谷川 成一

1978年(昭和53)8月、本学へ赴任する前に勤務していた東京大学史料編纂所では近世史料部に所属し、『大日本近世史料』の編纂と西国各藩の大名史料群の整理と研究に従事していました。同室の同僚のなかで、本務と合わせて鷹狩りの研究をしている方がいて、彼は熱心さが高じてご自宅で実際に鷹を飼育するまでになったと聞きました。当時、昼休みや調査の休憩時間などに、その方から鷹狩りや鷹に関するさまざまなエピソードを拝聴しましたが、興味深い内容ではあったものの、本務である近世史料の

編纂や自分の大名研究とはおよそ縁のないことだと思っていました。

しかし、本学に着任して本格的に弘前藩・秋田藩や近世蝦夷地の史料を研究すると、鷹関係の史料が次第に目につくようになりました。例えば、南津軽郡藤崎町の真名板淵は、江戸時代、天下に名の知られた名鷹の生息地であり、詳細な絵図が残っています。耳学問ではありましたが、鷹に関わる知識が根底にあったことから、史料をスムーズに読みこなすことができ、鷹にまつわる論文等もいくつか発表しました。文系とはいえ、このように研究のシーズは思いもかけぬところに存在し、その時は気がつかなくとも将来の研究に貢献することがあります。耳学問は疎かにできません。ご留意下さい。



研究室の備品

人文学部 教授
清水 明

退職するからといって大学を去るわけではない。来年度、非常勤講師をする。すると変わるのは、私が研究室を去ることである。

サールの「中国語の部屋」という思考実験がある。中国語を理解しない私が部屋に閉じ込められ、指令(英語)に従って中国語の問答をする。私には中国語の文字は模様としてしか区別できないが、指令によって文字の変換を行うことができ、外からは中国語を理解して応答しているかのように見える。サールの言い分は、理解して応答しているかのように見えても、部屋の中の私

に中国語の理解は元々ない。それと同様に、理解しているかのような働きをするコンピュータにも理解と呼べるものはない、というものである。

サールに対する反論に「システム説」がある。部屋の中の私には確かに理解はないが部屋というシステム全体が理解という働きを行っている、というのである。システム説は日常言語の用法に反しているが、理解ということばをそのように用いようという提案なら面白い。30年以上私は研究室に閉じこもり、ほとんど研究室の備品と化していた。研究室全体は一体何をしてきたのだろう。それは備品である私の理解を越えているに違いない。



人文学部 教授
村松 恵二

三十数年、弘前大学にお世話になりました。おかげさまで、充実した教員生活を送ることができました。教員や職員の方々、学生の皆さんに、心からお礼を申し上げます。ただ、思い返すと、もっと教育に時間を割くべきではなかったかという反省も浮かびます。赴任したての頃は、無我夢中で研究に取り組んでいましたから、読書会などもやってみたのですが、教養部ということもあって、学生と向き合う時間は多くはありませんでした。

在任中ずっと、大学は「改革」の渦中に置かれてき

ました。初めての委員が教養部改革委員会の委員でした。今、あちこちから「改革疲れ」も指摘されていますが、教育を大事にする動きだけは喜ばしく思っています。潜在能力をうかがわせる答案をしばしば目にしていましたので、学生を信じて、教育をさらに充実させれば、もっとしっかりとした基礎的学力(独学力)を身につけて卒業してもらえるのではないかと思います。

ただ、カタカナがキラキラ光る改革方針が、少々気がかりです。アクティブラーニングも重要でしょうが、古典的な教育方法、つまり、内外の文献の読み方を学び、文章力の訓練をすることがむしろ基本ではないか、などと「かび臭い」異見が頭に浮かんでしまうのです。感謝と充足感と一抹の不安をいだきつつ「卒業」いたします。



変化する大学の不易と流行とは？

教育学部 教授
麓 信義

ギリシャの学問は知的遊びとして存在し、その遊びの場が「スコレー（学校の語源）」でした。この言葉は、「余暇」あるいは「自由な時間」と訳されるようですが、古代ギリシャの知識人にとっては、余暇に学ぶことは遊びそのものであり、その遊びを追求した人間が最高の市民、フィロソファー（愛智人）でした。アリストテレスは、生活の必要性に囚われずに自由に思考遊戯するフィロソファーを人類の理想としていました。その精神は、中世に誕生した大学で学ばれた「自由学芸」という言葉にも反映されています（『余暇と祝祭』）。このように、本来、学問に従

事する大学人の活動目標は純粋な「知の探求」であり、産業革命時でも、実利的機械の発明者の多くは大学外の人間でした（『科学革命と大学』）。一方、日本の大学は欧米の学問成果の習得の場として明治政府が作ったものですが、自由な知的活動を保証する「大学の自治」は継承しました。

このような起源を持つ大学で大学闘争を経験したほぼ最後の世代の私にとって、「産学協同断固阻止！」というスローガンはいまだに心の中に焼きついていきます。もっとも、当時の私は、そのスローガンに全面的に賛成していたわけではなく、中庸の道があると考えていました。昨今の大学では、大学発祥当時の知的精神と正反対の「必要性に囚われた研究」が奨励されているように思われますが、学問の道を志している後輩学生諸兄には、今後の大学のあるべき姿を広い視野で考えながら、自らの専門を追求して欲しいと思います。



ネット&いじめ問題を弘大の重点研究・活動に

教育学部 教授
大谷 良光

型破りの「退職者の言葉」をお許し下さい。この「だより」を通して、佐藤学長、関係副学長、戸塚教育学部長、この問題の関係者、この問題を憂慮しておられる方に私の思いを届けさせてください。

ネット・ケータイ問題、いじめ問題は教育問題と同時に社会問題として存在し、今国民的課題としての焦眉の課題です。このような社会問題は、研究的な側面と同時に活動を通して実践的に深めていくことが求められます。青森県の唯一の国立総合大学としてこの問題に積極的に係わることは社会的意義が高いと考えます。

私は、東京都公立中学校で28年間勤め、弘大に赴任

しました。採用時の専門分野「技術教育」と異なりますが、学校教育における生活指導問題をもう一つのテーマとして研究し、5年前から任意研究組織である、弘前大学教育学部「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクト、学生組織である「弘前大学ネットパトロール隊」を組織し、学生の教員養成を兼ね実践的研究・活動を行ってきました。これらの組織の代表であった私が退職を迎えたため、組織を再編成し、弘前大学を基盤として活動できる後継システムはできました。しかし、活動場所の確保、予算的措置等を関係者をお願いしてきましたが残念ながら実現しておりません。

これらの研究・活動を担える団体が県内にないため、この取り組みは、県教育界では評価され存続・発展が求められています。是非、教育分野での大学の重点研究として位置づけ、青森の子どもたちを守るためご尽力をお願いします。



弘前で解けた“教育の課題”

保健学研究科 教授
松本 光比古

私は山梨県で生まれ、札幌に8年、千葉に1年、盛岡に18年、アメリカに1年、イギリスに1年、弘前で17年間を過ごしました。教育に携わるようになってから、教育はリーダーを育てることで、リーダーは“Leaders do the right thing whereas managers do things right.”でなければならないとアメリカ人の教授から教えられました。リーダーという吉田松陰が有名で、明治維新の陰の立役者として扱われてきたので、よく知っていると思い込んでいました。しかしイギリスでリーダーとして日本の吉田松陰に注目していることを知り、帰国後改めて彼の経歴や業績を調べてみました。そして津軽半島の先端まで視察に行った足跡、弘前の知識人と議論した家屋、矢立峠の石碑を見ることで、松陰の情熱を感じました。これは弘前に住む機会を与えていただけたからだと感謝しています。

私がこれまでの人生で出会った“リーダー”とみなせる方の何人かは、旧制弘前高校の出身者でした。弘前がリー

ダーを生み出したのは、甲府、札幌、盛岡にはなかった旧制高校があったからだと思います。旧制高校の入学定員は旧帝国大学の入学定員と等しかったので、受験競争という暗記競争は15歳までで終わり、16歳から18歳までは、「授業時間の3分の1は語学、読書によって人格を陶冶するという意気込みで学生たちは古今東西の名著を競って読みあさった。1日に1冊は読むのが当たり前だったという伝説もあります。」と言われるように、主体的に生きようとする人間には必要な“考える”生活を送ったのです。現在、旧制高校に相当する“考える”時間は、大学生生活の最初の一年間しかなく、18歳まで記憶競争が続き、19歳からは専門教育と称して別の暗記教育が始まるので優秀なマネージャーは生み出せても、本当のリーダーを生み出せるかは疑問です。アメリカの高校では日本のようなひどい暗記競争はなく、いわゆる大学はリベラルアーツと称して自由に考える時期であり、専門教育という暗記教育は大学院で始まります。“自分で考える”環境に乏しい日本ではありますが、過去に縛られることなく、今、面白いと関心を持ったことを好きになって、それに情熱を注げば、夢をかなえることは不可能ではありません。皆さんの飛躍を期待しております。

教 職 員



肉眼解剖の線描図を描いて41年

保健学研究科 教授
千葉 正司

本学理学部理学専攻科（生物学）を修了し、医学部解剖学第2講座（河西達夫教授）にお世話になってから41年が経過した。骨の名称が覚えられず、分解骨をスケッチしながらラテン名称を付記したのが、線描図描写の第一歩であった。スケッチは時間を要するが、骨の細部にわたる情報把握に大変有益であり、実習中に学生の質問に回答しながら学名を反復することで、名称と実体が少しずつ理解されてきた。

解剖学実習では、自分でも考えられぬほど、予習に

熱中した。学生の剖出を手伝いながら構造を同定し、数年もすると自然に、筋肉・血管・神経などの名称も身についてきた。河西教授の講話を拝聴しながら、男性実習体の所見を線描図413枚に記録し、つなぎ絵を折込にした大型図書『描画による解剖記録』を刊行するに至った。稚拙で何となく親しみのある最初の線画から最後となる線画までに、自らの観察眼の成長が如実に印されている。

肉眼解剖学を専攻する自分を育ててくれた医・理学部の恩師、丸進ゼミの仲間、解剖学教室の先生と職員、深夜まで解剖した医学生、着色を手伝った国病の看護学生、テニスや山の仲間、保健学科の教・職員の皆様に感謝いたします。理学・作業・放射線の学生が、骨や解剖所見を巧みに描くことを記して。



思い出すこと

理工学研究科 教授
倉又 秀一

弘前大学の教員になったのは平成2年4月でした。30歳代のすべては海外で過ごした私が、最も長く住む場所が弘前になりました。

私が大学院の博士課程にいた頃は、オーバードクター問題が深刻な時期でした。私がD1の時、指導教員の代わりに、アメリカで10日ほどの実験作業を行う機会を得ました。この時海外の様子を見て、博士課程修了後海外に出ることを考え始めました。この最初の海外体験は、その期間の会話の一語一語を、しばらくはすべて覚えているようなきわめて密なものでした。

こんな経験を持っていたので、大学の国際交流センター長として、学生が海外に行ける機会を増やせるように努力しましたが、まだまだの段階で留まってしま

いました。

アメリカでは、実験遂行の職で、講義は弘前大学に着任して初めてしました。講義をして、理解していたと思っていたことが「そういう事だったのか」と納得することが多々ありました。大学で教えることは、ただ既知の知識を伝達することよりは、答えのわからない問題に対し、いかに答えを見つけていくかを伝えることが大事だと思っています。それは基礎的な科目においても、出来上がったものというより、学生にとっては未知のものなので、自ら発見する経験が持てるような形で教えていくべきだと思い、実行してきたつもりです。そのためか、自分自身、多くの新たな納得を得ることが出来ました。

こんな風に弘前大学で過ごしてきましたが、何とか定年まで勤めることを許して下さった皆様に感謝いたします。



あづましい環境

理工学研究科 教授
鶴見 實

「あづましい環境」を求めて1977年から1993年まで東工大で、その後今日まで弘前大学で過ごしてきた。その22年間に八甲田山のCO₂による自衛隊員のガス事故やH₂Sによる女子中学生の事故、そして浅瀬石川の異臭味などの解明にかかわることになった。青森人は自然環境の豊かな土地柄だということに安心して、自然への対応がおろそかになっているように思う。一度自然を破壊して自然の大切さに気が付いたヨーロッパと、同じ道を日本もたどっているように思うが、青森はいま破壊のまっ最中

かもしれない。山の谷にはごみが埋められ、ため池は浚渫されたり、なくなりつつある。地球上で原生に近い自然環境は先進国にしか残らず、発展途上国の自然はどんどん消えて、南米の原生の森もなくなりつつあって、それを止める経済的なシステムはないのだそう。そういう意味で、青森の自然も当面の経済的な論理で消えそう。水の分析や土の分析そして放射能の分析をして身の回りの自然環境で何が起きているのか調べてきたけれど、自然豊かなあづましい青森を取り戻そうとしないと、気が付いたときには手遅れではもったいない。ゴミの分別やだんぶり池などは、市民としての意志表明であった。おいしい白神のブナの水を弘前の蛇口で飲みたいものだ。



退職にあたって

理工学研究科 教授
佐藤 魂夫

1977年5月に旧理学部の教務員として採用されて以来37年間、ずっと弘前大学で勤務しておりました。弘前に来て間もなく、1972年から始まっていた岩木山群発地震活動の中で最も大きな地震の洗礼を受けました。また、8月には北海道有珠山の大噴火があり、当時、下北半島の川内町に設置されていた地震計に有珠山の火山性地震が数多く記録されていることに驚きました。懐かしく思い出されます。その後少なからぬ数の大地震に遭遇し、その都

度、地震研究の発展に少しでも貢献したいと思いつながら努力してきましたが、特に記憶に残るのは1983年の5月に発生した日本海中部地震です。完成後間もない弘前大学理学部附属地震火山観測所で、再来間隔が500～1000年といわれる地震の貴重な記録を得ることができました。下北半島の泊、日本海沿岸の岩崎、津軽半島の三厩などの地震観測所は1982年の秋に完成したばかりで、ほんとうに間に合ってよかったと思います。教育・研究の場を与えて下さった弘前大学には心から感謝申し上げるとともに、今後の益々の発展を祈っております。学生の皆さんには実りある人生の実現へ向けて、がんばれー! とエールを送りたいと思います。



社会人としてバランスのとれた人間性

農学生命科学部 教授
菊池 英明

自分のことはさておき、という話で申し訳ないのですが、豊かな満足のいく人生を送るためにも、自分の才能を十分に発揮できるバランスのとれた人間性を持ち得ることが、いかに大切であるかということを、弘前大学に来て以来特に感じています。

人間の才能は多種多様であるわけですが、自分の才能に気が付かない、あるいはその能力を生かして伸ばそうということに貪欲ではない学生がしばしば見られ、「なんてもったいない!」と思うことがあります。これは、そのことに気付かせて自信を持たせ、さらに伸ばそうという補助や助言ができなかった教員の責任でもあります。しかし、日本の初等教育から高等教

育まで一貫して不足しているものが根底にあるようにも思われます。これは、人間としての自己と向き合せて、総合的な観点から自分に優れているところ、劣っているところを自らが判断するための基礎的方法論を学ぶ、という教育が不足しているのではないかと思います。勉強の到達度に関して言えば、全国統一学力テスト、センター試験などで否応なしに順位づけされるので受け入れざるを得ません。その意味からすると、日本のほとんどの大学で失われてしまった教養教育というのは、今こそ必要なのではないかと思います。特に、地方の中規模大学では教員の人員も限られ、専門の教員もほとんど置かれる余裕すらなくなっています。

本学のこれからの方向性がいささか心配ではありますが、少なくとも社会人としてバランスのとれた人間性を持った学生を、世界に送り出し続ける大学であることを願っております。



定年退職にあたって

農学生命科学部 教授
石黒 誠一

弘前大学に来てからあっといふ間の16年間でした。理学部、医学部、農学生命科学部と3つの学部を経験し、振り返ってみると、網膜の研究をずっとやってきました。

担当した講義の中で、一年生の基礎ゼミナール、二年生の細胞生物学、三年生の学生実験や文献購読などは必修で、教員としてやりがいがありました。春の研究室の花見、初夏の学科のソフトボール大会、秋の深浦ハウスでの合宿セミナー、冬の鍋。様々な行事の合間に、毎月、卒業研究、修士論文、博士論文のための

研究成果発表会をやってきました。私はこの発表会が大変楽しみでしたが、学生の皆さんはどうでしたでしょうか。

日本動物学会も弘前大学でやりました。多くのシンポジウムや600題以上の研究発表を準備するのは本当に大変でした。多くの先生方とその研究室の学生の皆さんのおかげで無事終了することができました。手伝っていただいた学生の皆さんとロマンピアで打ち上げをやったのを今でもよく覚えています。

多くの学生の皆さんと弘前大学と一緒に過ごすことができ、本当に感謝しております。これからも存在感のある大学として弘前大学が発展していくことを心から願っております。

教 職 員



去るにあたってひとこと

農学生命科学部 教授
佐原 雄二

18歳で入学して以来、47年間を大学というもので途切れなく過ごし、最後の36年間は弘前大学に多大なお世話になった。長年月をその中で生きてきた大学というものについて、このごろ感じていることを、定年で去るにあたり書いておきたい。

私が学生だったころ、三者自治という言葉があった。学生、教員、事務職員の三者は、それぞれ立場は異なっても大学に不可欠の構成員であり、学外からの理不尽な干渉に対しては共通して対処し独立性を守るべきだという考え方である。だから学生もまたそれなりに大学の在り方について意見と責任を持つべきなのであっ

た。この言葉をしばしば聞いた1970年前後の大学激動期は、社会全体もまた「議論の時代」だったと思う。

今はどうか。大学当局は学生を顧客として扱い、学生もそう扱われることに疑問を持っていない様子だ。弘前大は「改革」(かどうか?)の方向を強制されて悩みのただ中にある。大学間には激しい競争があおられ、学生もまた余裕がなく内向きになっているようだ。これで大学の自由な発展が望めるのだろうか。大学は社会の反映でもある。現在は個人も大学も、息苦しい競争社会の中で大らかさを失って苦悩し呻吟していると見える。

私たちの生きているこの時代も、やがては歴史の一部になる。後代の人たちから「あの時代の社会は、大学は、どんな意味を持ったのか」といづれ問われることになるのだろう。さて、私たちはその答えを準備できているだろうか。



地域社会で学ぶ

地域社会研究科 教授
檜 貢

大学教育において高めた能力を修了後に生かすこと。これは自明のこのようですが、実際には、大学教育は若者の通過儀礼のようにみなされていると感じています。多くの学生は大学で決めたカリキュラムによる授業を受け、単位取得により卒業します。結果として、大学の先の社会を学ばないままに、就職先に飛び込んでいるのです。

私が弘前大学に在籍した7年はそれが変わる期間で

した。地域社会で学ぶことを試行する期間でした。敷居が高いといわれる大学。大学の先生を避けようとする風潮の社会。それでも大学も地域社会で学ぶという風は吹いていました。

地域社会は先生方の授業のように論理的ではありません。複雑で、様々な課題、問題のなかにあって、随時にたくさんの意思決定をすることが求められております。それに逃げずにぶつかっていくことが大切なのです。大学生が地域社会で学ぶことがこれから年を追って深まるはずですが、そこでの皆さんの成長を楽しみにしています。



定年退職を迎えて

医学部附属病院
看護部 看護師長
堀内 悦子

弘前大学医学部附属病院看護部の一員となってから38年「看護の道」を歩んでまいりました。多くの皆様のご支援を頂き、退職の日を迎えることができますことを心より感謝申し上げます。

昭和51年、一年目は助産師として産婦人科病棟に配属されました。その後はR1病棟、小児科病棟、旧第三内科病棟と思ひ起こせば、忘れられない思い出が走馬灯のようにかけ巡ります。昭和52年、水害の影響で分娩が受け付けられなくなり、約50件の分娩予定者を他の施設へ紹介する事態となり、大変でした。

小児科では「死にゆく子供たちに寄り添う」看護の辛い思い出が何度もあります。そんな中でも子供たちの笑顔から、たくさんの勇気と元気をいただき、「いつでも笑顔で寄り添う」ことが私の看護の原点となりました。

平成14年、看護師長となり、外来総括師長として、総合診療部、外来化学療法室の開設に関わりました。その後旧第三内科と眼科病棟に配属されましたが「師長さん、事件です」のハラハラ、ドキドキの日々でした。私は、いついかなる時も弘前大学医学部附属病院の看護師として自覚と誇りを持ち、歩んできました。とても楽しかった！

最後に弘前大学のますますの発展と職員皆様のご健康を祈念し、退職のご挨拶とさせていただきます。



感謝の気持ちをこめて

医学部附属病院
看護部 看護師長
樋口 三枝子

弘前大学医学部附属病院の一員として、看護の道を歩み始めてから35年間、多くの皆様からのご支援を頂き、無事に退職の日を迎えることができました。振り返ってみると、昭和53年弘大病院に就職して、旧一病棟2階（脳外科病棟）から始まり、同年9月に手術部・救急部、ICUに移動となり18年間スタッフとして勤務しました。平成7年に手術部の副看護師長、平成10年にICUの看護師長になりました。ICUは患者様との短期間のかかわりが多い部署ですが、患者様がー

番苦しい時期に、寄り添い看護ケアができることに看護師としての喜びを感じてきました。その後、感染対策担当看護師長、循環器内科・心臓血管外科病棟を経て、平成22年4月から高度救命救急センターの勤務となりました。患者様やご家族が笑顔になれること、一緒に働いているスタッフが生き生きと仕事ができるように応援することをモットーに働いてきました。今まで勤務できましたのは、上司の方々や同僚・家族の理解・指導・支援と力強いスタッフのサポートや励ましがあったからこそ思っております。心より感謝し、お礼を申し上げます。最後に、弘前大学に勤務される皆様のご健康とご活躍を心からお祈りし、退職のご挨拶とさせていただきます。



定年を迎えて

医学部附属病院
看護部 副看護師長
成田 牧子

この春に無事に定年を迎えることになりました。

長い時間なのに今になるとあっという間に過ぎたと思えるのは不思議です。私は弘前大学医学部附属看護学校を卒業しました。寮生活は楽しく花見には男子寮にストームをかけに行ったりした思い出があります。そこで培った同級生の絆は強く、いまだに交流が続いています。就職したての頃の台風による大洪水。新病棟への移転。コンピューター導入。新外来への移転。そして東北を襲った大震災。ちょうど患者様が帰った

あとに震災がはじまりました。後で幼なじみが亡くなったと知り、大変ショックでした。

昨年、医学教育関係業務功労者として表彰されたことは家族共々喜ばしい出来事になりました。ある先輩が「どんなに嫌いな人からも必要な人になりなさい。」と言われ心にとめて仕事に努力してきました。

これまで多くのスタッフ・患者様に教えられ、成長することができました。忘れられない患者様もいます。その方々にいただいた言葉に支えられ、励まされました。患者様・先輩・後輩・医師・コメディカルの方・家族・友人すべてに感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。



弘前大学との縁

医学部附属病院
医事課 課長補佐
日景 正彦

昭和49年、20歳、東京で専門学校を卒業し映画制作の録音という好きな職に就いたものの、給料が安すぎて先行き不安になりすぐ辞める羽目になった。

ちょうど第一次オイルショックで就職難の時代、良い就職先が無く困っていた。その頃、大館市の実家に帰省し、たまたま来た弘前の南塘の土手で、車の窓から見えた大学病院の古い病棟、これはきっと病院を建て替えて大きくするに違いない。その時に就職出来るのではないかと、当時は大学病院が国の機関であるこ

とも知らない自分がそう思ったことを良く覚えている。

その後国家公務員試験等に合格、開業を間近に控えた山形大学病院に配属された。昭和51年10月の事である。その年の12月に父が工作中的の事故で亡くなり、上司の計らいで昭和54年9月に弘前大学へ転任させていただいた。

そして今、昔勤められればと思ったこの大学病院を最後に定年退職を迎えることができる。自分にとっては出来過ぎで不思議な感じがしている。

弘前大学では経理部（財務部）と病院医事課を交互に異動し、電算化業務を中心に約35年間お世話になった。多くの皆様に力不足を助けていただき、たいへん感謝している。

「どうも、ありがとうございました。」

教 職 員



退職にあたっての回想

医学部附属病院
薬剤部 薬剤主任
野呂 秀紀

時の流れるのは真に速いものである。小生がここの弘前大学病院薬剤部に勤務するようになってもう35年になる。今思えば弘前大学の研究機関としての発展にとって自分は不相応な立派な職場だったようだ。でも小生にとっては楽しくもあり、充実した職場でもあった。そんな自分も研究業務をした時もあり、また様々な薬剤師としての業務のことを経験させていただきました。今は新しい病院になったが取り壊す前の旧病棟を今でも歩けと言われたらおそらく頭ではなく体で覚

えていて歩けるであろう。薬剤部の業務も様々に機械化され、それこそ自動で動く注射剤、錠剤などのピッキングマシンなんぞの動く様は天秤の分銅を載せて散薬を秤量していた当時には想像さえできなかった。それだけ変わった。今の病院は機械化されある意味合理的で大切なことではあるが昔にもそれなりに余裕のあるというか、いいところもあったような気もする。先に退職されていった薬剤部の諸先生をはじめ、各部署の医師、看護婦は道ですれちがっても今でも弘前大学の職員仲間であると思っている。明治は遠くになりけりという言葉があるが、小生にとって昭和は遠くになりけりでもある。これからの更なる地元弘前大学の発展を望んでやまない。今まで在籍させていただき本当に有難うございました。



弘前大学を去るにあたって

医学部附属病院
栄養管理部 管理栄養士長
平野 聖治

昭和49年4月、弘前大学医学部附属病院業務課給食係に栄養士として採用となり、今考えればあつという間の40年間でした。採用時の仕事は献立作成と濃厚流動食の調整が主な仕事でした。電算化されている今とは違い、献立は手書き、濃厚流動食は現在の用に既成品が無かった時代で病院の約束食事箋に基づき、通常の食材と粉末の栄養食品を業務用のミキサーにより半日かけて約70食～90食分を作っていました。体力の低下している患者さんが摂取することが多く、特に

衛生面に神経をつかい作っていたことを記憶しております。

在籍中にもっとも記憶に残っていることは、昭和52年8月5日深夜に病院を襲った水害です。厨房も水害に遭い約2週間、使用できなくなり弘仁会の食堂、市内の学校給食センター、国立弘前病院、弘前鷹揚郷病院、仕出し店等にお世話になり代替食を作ってもらい患者さんに提供したことです。

在籍中は、一人では何もできず弘前大学の皆様には長きに渡り、大変にお世話になりました。最後になりますが、良き仲間がいる栄養管理部を今後ともよろしく願いいたします。





教育学部 講師

稲村 一隆

昨年11月から教育学部の哲学研究室に着任した稲村一隆と申します。専門はギリシア哲学です。プラトン、アリストテレスのテキストを古典ギリシア語で読みながら人間の価値に関わる概念を明晰にする作業を行っています。またギリシア哲学が近現代の倫理学、政治哲学にどのように影響を与えたのかについても興味を持って研究しています。弘前で様々な出会いがあるのを楽しんでおりますし、今後も楽しみにしています。どうぞよろしくお願い致します。



農学生命科学部 助教

加藤 千尋

2013年11月より農学生命科学部 地域環境工学科 農地工学分野に着任致しました。作物の生育環境として重要な農地土壌の水分・温度状態の予測や、農地保全に関わる研究に取り組んでいます。初めての東北での生活となりました。秋晴れの着任日の朝、キャンパスから臨んだ岩木山は美しく、また見守ってくれているようで印象に残っています。これから、教育・研究に邁進したいと思います。どうぞよろしくお願い致します。



COI研究推進機構

機構長補佐・教授

村下 公一

2月1日付けでCOI研究推進機構に着任しました村下公一です。本機構では、本学と行政・大手民間企業などが連携し、医療・健康ビッグデータを活用した脳卒中や認知症の早期予兆発見や予防法の開発に取り組んでいます。本プロジェクトは、青森県健康寿命の延伸にも大いに貢献できるものと期待され、非常に社会的意義も高く、やりがいを感じております。ぜひ、この弘前の地に、国内外の産学官の英知を結集して、世界に通用するイノベーション創造の拠点づくりにチャレンジしたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

理工学研究科

理論宇宙物理学の研究室

理工学研究科・物理科学コース
教授 浅田 秀樹

1. はじめに

この度、光栄にも、第3回弘前大学学術特別賞「遠藤賞」を2013年（平成25年）末に受賞することができました。これまでの研究に関して、学生、同僚、そして、職員の方々に感謝申し上げます。今回受賞の対象となった研究成果は、「宇宙におけるエキゾチックな（新奇な）物質、エネルギーおよび時空構造の探査法の理論」です。アカデミックな紹介については、本稿の後半（3の(2)）にて行いますので興味のある方はご覧下さい。

2. 研究室紹介

受賞対象となった研究の多くは、指導する学生（主に大学院生）との共同研究や彼らとの議論に基づいております。研究室の体制ですが、本研究室はいわゆる講座制を採っていないため、同じ宇宙物理学分野の仙洞田雄一先生と連携して、研究室のコロキウムやゼミ等の教育活動を行なっています（写真1）。また、卒業研究の発表会は、例年、宇宙線実験の高橋信介先生の研究室と合同で行なっています。受賞対象となった成果も、このような活動の中で出てきたものです。

我々の研究成果については、海外でも興味を持っていただいております。学術雑誌での論文発表以外にも、2011年には英国オックスフォード大学出版局から「Equation of Motion in General Relativity」のタイトルで、書籍（共著）の執筆を行ないました。また昨年暮れには、2週続けて招待講演も行なっています。

1件目は、パリ（フランス）にある研究所での招待講義（2013年11月27日）です。これは「バーチャル講義」で、インターネット回線を使ったテレビ会議形式での講演でした。つまり、（私個人としては残念ながら）パリに行くことなく、自室PC前での講演となりました。このパリの講演シリーズの動画は、皆さんご存じの「You Tube」と同様に、先方のサーバーに保管され、いつでもどこでもインターネット経由で見ることができます。実施動機は、研究者支援のためだそうで、特にアフリカや南アジア等の研究機関に所属する研究者にとって外国で行われる国際会議に参加して最新の情報を入手するのは極めて困難であるため、彼らを支援する事業の一環



写真1 研究室の院生らとのゼミ風景

として、数年前にスタートしたそうです。

2件目は、国立清華大学（台湾）での「天体力学N体力学に関する台湾日本シンポジウム」（2013年12月6-7日）です。学際領域のシンポジウムだったため、私のような物理学者だけでなく、数学者、天文学者、宇宙航空工学者なども参加していたので、通常の学会活動とは違う研究交流ができました（写真2）。

これら2件の招待講演の他、本学創立50周年記念会館にて主催した国際会議「JGRG23」（参加者百数十名規模。2013年11月5-8日）では、院生らが発表しています。開催に関しては、関係事務職員の方、そして、研究室の学生にも色々協力してもらいました。最先端の研究、及び、海外の研究者との交流は、学生にとってよい刺激になったようでした。

3. 研究紹介

(1) 受賞対象の研究の背景

—宇宙におけるエキゾチックな（新奇な）物質、エネルギーおよび時空構造の探査法の理論—

地球上の身の回りの物質は、いわゆる周期律表に載っている既知の元素から成り立っています。一方、広大な宇宙に目を向けると、驚くべきことに、宇宙における質量の9割以上が、これらの物質とは異なる未知の物質に占められています。その未知の物質は大きく2種類あることが判明（ただし物理的な正体は未知）しており、各々「ダークマター」および「ダークエネルギー」と現在呼ばれています。つまり私たちの知っている周期律表に載っているような通常の原子は、宇宙においてはわずか数パーセントの組成比に過ぎないのです。ダークエネルギーの存在を強く示唆する証拠である「宇宙の加速膨張」を1990年代に発見したパールムター氏ら3名が、2011年のノーベル物理学賞を受賞したことから分かるように、当該分野への社会的注目および評価は高いものとなっています。当然、「ダークマター」、「ダークエネルギー」に関わる天文観測および、関連する物理学研究が世界的に活発になされていま

す。こうした流れの中で、物理的に正体は未知の既存の概念である「ダークマター」および「ダークエネルギー」に続く、宇宙における第3、4の未知の物質やエネルギー（「エキゾチックな物質やエネルギー」）の発見につながる可能性があるオリジナルな理論探求を、浅田をリーダーとするグループが近年行ってきました。これが、受賞対象となった「宇宙におけるエキゾチックな（新奇な）物質、エネルギーおよび時空構造の探査法の理論」です。

現在最も確立されている重力理論は、皆さんご存じのアインシュタインによる「一般相対性理論」と呼ばれる学説ですが、この理論では従来の力学とは異なり、いわば「舞台」である「時間空間」自体が動的に変化します。天体が加速度運動すると、まるでプールに石を投げ込んだ時に生じる波のように、周りの時間空間の歪みが伝わるのです。これを「重力波」と呼び、理論的にはその存在が予想されています。しかし、未だ検出には至っておらず世界的な検出競争が続いており、我が国においても98億円の文科省予算が認められて大型検出装置「KAGRA」が現在建設中です。このように日本を含む世界が上述の研究に注目する中、本研究が対象としている「エキゾチックな物質やエネルギー」は、アインシュタインの重力理論の改良を示唆している可能性があります。この件に関しても世界的な研究競争が始まっています。

(2) 最近の主な研究成果

—アカデミックな紹介—

まず、重力波研究分野において、新規の重力波の発生源としての「3体系」の提案をし、波形の理論計算を行ないました。そしてこの3体系からの重力波の計算精度を高める目的で、高精度での3体系ダイナミクスを調べ〔Yamada, Asada, 2010〕、この研究成果は、米国物理学会発行の雑誌に掲載されました。なお、筆頭著者である大学院生の山田慧生

君は、日本学術振興会の特別研究員に採用されています。それまでアインシュタインの一般相対性理論を超える理論の提案に対して、それらの実験的検証はほぼ皆無であり、将来の宇宙観測のみに頼るものでしたが、我々が初めて、地上実験でも可能性を検討し、チャーンサイモン重力予想を「量子干渉計」を用いて検証する提案を行ないました〔Okawara, Yamada, Asada, 2012〕。

一般相対性理論は非自明な時間空間の幾何（トポロジー）を許します。なかでも、時間空間のトンネルと呼ばれる「ワームホール」の研究は、特に理論物理学分野において1980年代から盛んになされてきました。このワームホールの形成には、通常の物質の法則（状態方程式とよばれる）には従わない「エキゾチックな（新奇な）物質やエネルギー」が必要であることが知られています。よって、宇宙におけるエキゾチックな物質やエネルギーを探するには、ワームホール天体を探索することが有効です。我々は「位地天文学」と呼ばれる天文学的手法を用いて、通常天体とワームホール天体とを区別して発見する手法を初めて提案しました〔Toki, Kitamura, Asada, Abe, 2011〕。これは、指導した学部学生の土岐幸晴君および北村隆雄君の2名の卒業研究の成果で、米国天文学発行の雑誌に掲載されました。さらに、ワームホールによる光線の曲がり角の従来の計算に不備があることを指摘しました〔Nakajima, Asada, 2012〕。この指摘は、先と同じく、指導した学生の中島昂己君の卒業研究の成果であり、ほぼ同時期に、英国ケンブリッジ大学のギボンズ教授らのグループも我々と同様の結果を独立して発表しています。

さらに、次のような研究成果もできています。実はエキゾチックな物質やエネルギーを伴う天体は、ワームホールに限りません。我々はこのような「エキゾチックな天体」を記述する一般的な時間空間構造の数学的モデルを提案しました。その理論モデルを用いて、集光のみ起こると考えられていた従来の常識を覆し、「天文学的な減光」を探することで、そのエキゾチックな物質等を見つけることが可能になることを初めて指摘しました〔Kitamura, Nakajima, Asada, 2013〕。さらに、観測的宇宙論が専門の高橋龍一先生と協力して、「スローン・デジタル・スカイ・サーベイ」と呼ばれる世界最先端の天文サーベイ観測の結果を用いて、エキゾチックな物質やワームホールの組成比（宇宙にどのくらい存在するのか）への上限を初めて与えています〔Takahashi, Asada, 2013〕。

4. さいごに

宇宙は広く未知は多く、探索の興味は尽きません。今後とも、学生と共に研究を推進していく所存です。皆様のご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



写真2 シンポジウムでの集合写真

理工学研究科

物質創成化学科

理工学研究科・物質創成化学科 澤田研究室
教授 澤田 英夫

この度、「弘前大学学園だより」編集委員会より研究室紹介に關します原稿依頼を頂きました。これは本年度の「弘前大学学術特別賞（遠藤賞）」を受賞させて頂いた関係で、研究室紹介を依頼されたものです。それでは、澤田研究室の現況、次いで今回の受賞に關連します研究概要について紹介させて頂きます。

現在、澤田研究室には博士後期3年生 2名（内、1名は留学生で秋季入学）；博士後期2年 1名；博士後期1年 2名（内、1名は社会人）、博士前期2年 4名；博士前期1年 3名；学部4年 4名の計16名が在籍しております。研究室の研究テーマは、主に“含フッ素高分子ナノコンポジット類の創製と機能開発およびその応用”に關する研究であり、今回、この研究内容が遠藤賞受賞の対象となりました。本研究の概要は以下のようです。

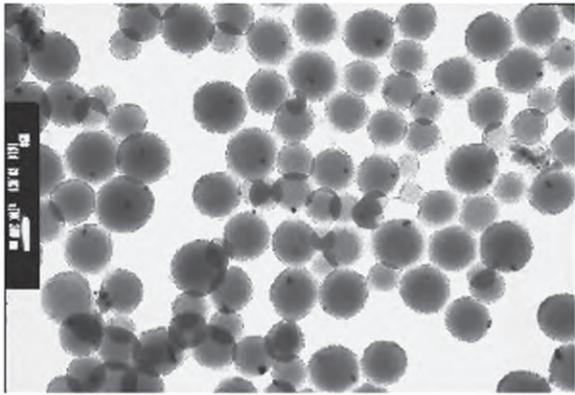
一般に、有機フッ素化合物は互いに反発する性質があるため、対応するフッ素を含まない有機化合物に比べ沸点が低くなり、固体の有機フッ素化合物においては昇華しやすい傾向にあります。しかしながら、我々の研究室で開発されたフルオロアルキル基が高分子主鎖末端のみに導入された含フッ素高分子化合物中のフッ素は、互い反発するのではなく、逆に凝集することを高分子化学の分野で初めて見いだしました。この凝集する性質が活かされ、含フッ素高分子化合物は互いに自己組織化し、新しいタイプの含フッ素高分子ナノ粒子を構築します。我々の研究室では、興味深いことに、シリカナノ粒子、ヒドロキシアパタイトナノ粒子、金ナノ粒子、フラーレン、酸化チタンナノ粒子等の種々のゲスト化合物をフッ素高分子ナノ粒子コア内へ容易にカプセル化させることに成功し、対応する含フッ素高分子／ゲストナノコンポジット類の開発を可能とさせました。例えば、図1には金ナノ粒子が含フッ素高分子ナノ粒子コア内へカプセル化され、含フッ素高分子／金ナノコンポジットが生成している電子顕微鏡写真を示しました。

これら新規に開発された含フッ素高分子ナノコンポジット類においては、対応する従来の高分子ナノコンポジット類とは極めて異なった特異的な機能発現が可能となりました。例えば、有機物は一般に燃えやすいですが、我々が開発した特定の含フッ素高分子／シリカナノコンポジット中における含フッ素高分子は800℃焼成後においても不燃性を示すことを初めて見いだしました。実際、未処理沔紙はライターにより着火させると燃えるのに対して【図2-(A)】、特定の含フッ素／シリカナノコンポジットで表面改質させた沔紙をライターで着火させても、改質沔紙は不燃性を示し、その表面に一部、煤が付着する程度である【図2-(B)】ことを明らかにさせました。

我々が開発した含フッ素高分子ナノコンポジットはガラスの表面改質へも応用でき、改質されたガラス表面に超撥水性（水の接触角が180度となり、水滴が改質膜に付着できない状態）さらには超撥油性【油滴（油としてドデカンを使用）が98度となり超撥油性を示す状態】を付与させることを可能とさせました【図3】。

このような超撥水性・超撥油性（超両疎媒性）を示す含フッ素高分子コンポジットは、現在、企業との共同研究を通して新たな市場開拓へ繋げうる貴重な研究成果となっています。

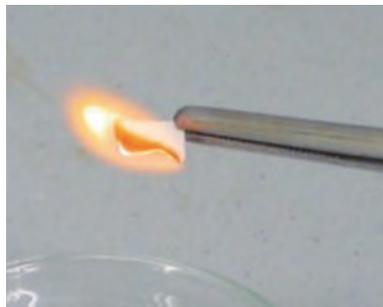
最後に、ここ5年間におけるこのような研究成果は極めて独創的であり、さらにその応用展開も十分可能であることを高く評価して頂き、この度の栄えある遠藤賞に繋がりました。今回の受賞は小職の研究室所属の学部・大学院学生の研究成果の賜であり、この場をお借りし研究室の学生の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、電子顕微鏡の測定に際してご丁寧な指導を頂きました機器分析センター電子顕微鏡室 對馬優聖氏に深謝します。これらの研究の一部は、学内の機関研究（研究代表者 岡崎雅明教授）の助成により遂行されたものであり、ここに感謝申し上げます。



200 nm

図1 含フッ素高分子ナノ粒子コア内へカプセル化された金ナノ粒子の透過型電子顕微鏡写真

(黒く見える部分がカプセル化された金ナノ粒子に対応します)



(A)



(B)

図2 未処理沓紙がライターにより燃える様子の写真(A)、および含フッ素／シリカナノコンポジットにより表面改質された沓紙をライターにより着火させている写真

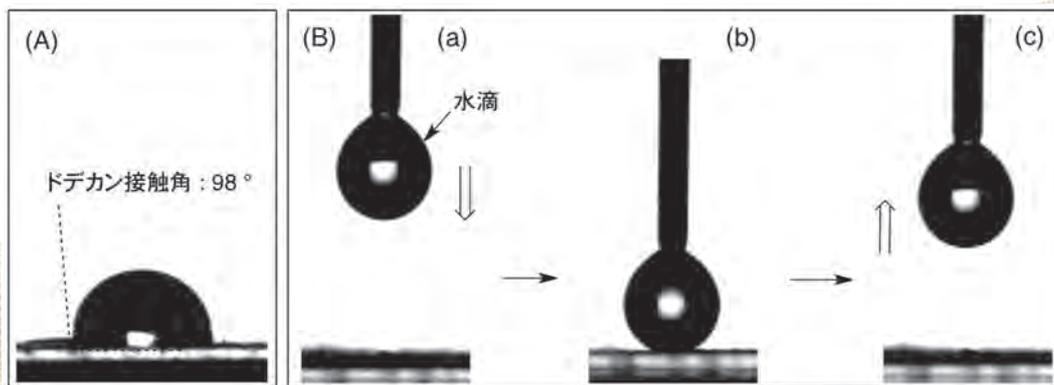


図3 改質膜表面において超撥油性を示す油滴（ドデカン）：(A) および超撥水性を示す水滴：(B) (a) シリンジの先に付着した水滴を改質ガラス表面に滴下させる状態；(b) シリンジの先に付着した水滴を改質ガラス表面に滴下させた状態；(c) シリンジを引き上げた状態（水滴が改質ガラスに濡れないためシリンジの先に付着したまま水滴が引き上げられる様子）

平成25年度弘前大学学生表彰を実施

本学では、研究活動や社会活動、課外活動で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰授与式を、3月3日（月）事務局3階大会議室で行いました。

今回の受賞者は、課外活動等で活躍した6団体、研究活動や社会活動、課外活動で活躍した学生30名で、表彰式には各研究科長・各学部長、指導教員及びサークル顧問の教員も出席し、佐藤学長から学生1人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

佐藤学長から、「大学の一番大切なことは、多様性である。いろんな活動で表彰を受けたということは、学内で様々なことに取り組んでいる学生がいることの象徴である。この表彰を機に益々精進して、周囲全体の底上げに貢献してもらいたい。」と学生の功績を讃える言葉が贈られました。

受賞者を代表して、教育学部生涯教育課程4年の駒目瞳さんが「今後も、大学生としての本分を全うし、自分たちが弘前大学の学生であるという誇りと自覚を持って、それぞれの活動に励んでいきたい」と謝辞を述べました。



佐藤学長（前列右から8人目）と受賞者ら

平成25年度弘前大学学生表彰採択一覧

【団体】

■社会活動及び課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	団体名	受賞理由
1	環境サークルわどわ	設立以来10年にわたり、卒業生の優良な家電・家具300点余りを新入生や留学生に配るリユース・リサイクル活動に成果をあげている。また、清掃活動や裏紙メモ帳配布などを行っている。
2	teens & law	青森県BBC連盟として、更生保護事業と青少年の健全育成に寄与したとして、平成25年11月13日に青森保護観察所長より感謝状を受け、関連機関誌の「更生保護みちのく679号」、「更生保護あおもり76号」、「ともだち196号」で活動内容が掲載された。同年11月3日の「裁判員裁判へのアクセス」シンポジウムの開催にもあたった。
3	人文学部 国際協力論ゼミ・ブックレット 編集委員会	国際協力関連書籍2冊を編集・出版し、弘前大学学生の力を示し、本学の名を広く知らしめた。 1冊目：『津軽から発信！国際緊急医療援助に生きる 朝日茂樹医師のJDR活動編』（弘前大学出版会、2013年7月発刊） 2冊目：『津軽から発信！母国を離れプロフェッションに生きる 国際コーディネーター編』（同、2013年12月発刊）

■課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	団体名	受賞理由
1	弓道部	第52回東北大学生弓道大会男子部 団体優勝
2	医学部ラグビー部	第56回東日本医科学生総合体育大会 優勝
3	医学部バドミントン部	第43回北日本医科系学生バドミントン選手権大会 男子団体優勝、女子団体優勝 第3回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子団体優勝

【個人】

■研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生等

No.	氏名	学部・学年	受賞理由
1	吉田 太郎	医学部医学科5年	平成25年6月、札幌で開催された第102回日本病理学会総会において研究成果を発表し、病理学会総会発表賞を受賞した。
2	遅野井 祥	医学部医学科6年	平成25年6月、米国シカゴ市で開催された第73回米国糖尿病学会において「2型糖尿病β細胞に関する演題」で口演発表をした
3	嶋村 拓人	理工学研究科 博士前期課程1年	平成25年10月25日、国際会議として開催された色材協会創立85周年記念会議(85th JSCM Anniversary Conference "Toward Colour and Coatings in the Next Generation")で数多くのポスター発表(発表総数:49件)の中から優秀な発表として「ポスター賞」を受賞した。
4	續石 大気	理工学研究科 博士後期課程2年	[Interaction of Fluoroalkyl End-capped Oligomer/Polyaniline Nanocomposites with Silica Fine Particles Possessing Amino Groups]に関するポスター発表に対して、平成25年9月30日[International Symposium for the 70th Anniversary of the Tohoku Branch of the Chemical Society of Japan]におけるポスター発表(発表総数:721件)の中から優秀な発表として、優秀ポスター賞を受賞した。
5	郭 素娟	理工学研究科 博士後期課程3年	平成25年10月20日、[Preparation and Photocatalytic Activity of Fluoroalkyl End-capped Vinyltrimethoxysilane Oligomer/Anatase Titanium Oxide Nanocomposites-encapsulated Low Molecular Weight Aromatic Compounds]に関するポスター発表に対して、International Union of Pure and Applied Chemistry: 9th International Conference on Novel Materials and their Synthesis (NMS) IUPAC Poster Prizeを受賞した。
6	久野木梓織	理工学研究科 博士前期課程2年	2011年6月に長崎大学長崎丸により実施された観測に参加し、その観測結果をまとめ、海洋気象学会が発行する査読(査読員2名)付き学術誌である「海と空」(第89巻第1号(2013)創刊大正10年)に筆頭著者論文として成果を発表した。
7	後藤 麻友	理工学研究科 博士前期課程1年	平成25年10月24日、「平成25年度消防防災機器等の開発・改良、消防防災論文及び原因調査事例報告」に応募した論文「微量のエタノール添加によるウォーターミスト消化性能の向上」が、一般の部/消防防災科学論文で消防長官優秀賞を受賞した。
8	石田 卓也	理工学研究科 博士前期課程2年	平成25年9月29日～10月3日、韓国(済州島)で開催された「10th Asian Thermophysical Properties Conference」において「Visualization Study on Open-loop Pulsating Heat Pipe Self-wetting Fluids」に関する研究発表を行い「Best Student Paper Awards」を受賞した。
9	張 鵬	理工学研究科 博士後期課程1年	国際学術誌に2編の論文と国内外学会において9回の研究発表を行い、世界に通用する大きな研究成果をあげた。
10	馬 宇飛	理工学研究科 博士後期課程1年	国際学術誌に1編の論文と国内外学会において7回の研究発表を行い、世界に通用する大きな研究成果をあげた。
11	MALINEE KAEWPANHA	理工学研究科 博士後期課程2年	国際学術誌に5編の論文と国内外学会において11回の研究発表を行い、世界に通用する大きな研究成果をあげた。
12	中野 敬護	農学生命科学研究科 1年	平成25年3月24日～3月26日に開催された2013年度日本草学会において、「温暖化ストレスに対するオーチャードグラスの集団分化」に関する研究発表を行い、優秀若手発表賞を受賞した。
13	外和 昌大	農学生命科学研究科 1年	オーストラリアにおける野生イネの遺伝資源としての評価に取り組み、新種候補である新たな多年生野生イネを見出し、その遺伝学的研究成果を国際誌であるRice (IF2.38)において発表した。

■課外活動で特に顕著な功績があった学生等

No.	氏名(団体名)	学部・学年	受賞理由
1	山形真由佳	教育学部2年	第66回東北学生陸上競技対校選手権大会 女子ハンマー投 第1位 第44回東北陸上競技選手権大会 女子ハンマー投 優勝 第42回東北学生陸上競技選手権大会 女子ハンマー投 第1位
2	駒目 瞳	教育学部4年	第35回北日本学生陸上競技対校選手権大会 女子10000m競歩 第1位 第44回東北陸上競技選手権大会 女子5000m競歩 第3位
3	大久保玲美	医学部保健学科1年	第52回全日本50km競歩高島大会 一般女子10km競歩 第2位 第42回東北学生陸上競技選手権大会 女子10000m競歩 第1位
4	有田 真	理工学部4年	第35回北日本学生陸上競技対校選手権大会 男子800m 第1位 第35回北日本学生陸上競技対校選手権大会 男子1500m 第1位
5	古山礼美奈	医学部医学科1年	第49回東北地区医科学生弓道大会女子個人戦優勝、新人賞
6	高橋 一聖	教育学部1年	第45回全日本ジュニア柔道体重別選手権大会東北地区予選会 男子:90kg級 優勝
7	板矢 一希	医学部保健学科1年	第3回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 男子シングルス優勝
8	川崎 圭恵	医学部保健学科2年	第3回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス優勝
9	藤田 佳澄	医学部保健学科4年	第3回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子ダブルス優勝
10	鎌田 千尋	医学部保健学科4年	第3回北日本保健学系学生バドミントン選手権大会 女子シングルス優勝
11	伊藤 真子	医学部医学科2年	第56回東日本医科学生総合体育大会 陸上(女子走高跳)第2位
12	高橋 茜	医学部医学科2年	第55回東日本医科学生総合体育大会スキー競技 女子回転準優勝、新人賞
13	宇佐美真太郎	医学部医学科4年	第55回東日本医科学生総合体育大会スキー競技 男子回転優勝
14	吉川 良平	医学部医学科6年	第55回東日本医科学生総合体育大会スキー競技 男子複合最優秀選手賞
15	及川 龍二	理工学部1年	第28回北部地区国公立大学選手権水泳競技大会 男子100m背泳ぎ 第1位 男子200m背泳ぎ 第1位
16	阿保 貴大	理工学部2年	第28回北部地区国公立大学選手権水泳競技大会 男子200m自由形 第1位
17	高林 杏奈	医学部医学科5年	第56回東日本医科学生総合体育大会夏季大会水泳競技 女子100m自由形 第1位 女子200m自由形 第1位

弘前大学「第9回学生相談を考える会」を開催

平成26年2月17日（月）、学生相談に携わる学内外の教職員を対象にした「第9回学生相談を考える会」を開催しました。同会は多様化・複雑化する学生相談に適切に対応し、学生への支援体制を充実させようと平成20年度から開催しており、今回で9回目（本年度2回目）の開催となります。近隣の秋田大学外、他大学等も含め約60人が参加しました。

今回は、富山大学保健管理センター准教授であり、学生支援センターアクセシビリティ・コミュニケーション支援室長の西村優紀美先生をお招きし、「発達障がい大学生に対する理解と支援～特性に対応した学生相談～」と題した講演をしていただきました。

その後、本学教育学部松本教授のコーディネートにより行われたディスカッションでは、西村先生、保健管理センター田名場准教授、同高橋講師と参加者を交え、発達障がい学生への支援において、先進的な取組をしている富山大学の支援例などに対しての活発な質問などがあり、発達障がい学生の特性に対応した相談について、事例をもとにいろいろな角度からの意見を交わす貴重な機会となりました。



VI 編集後記

昨年の弘前の豪雪を思い出してみてください。それに比べると今年はかなり楽な冬だったように思えます。反面、関東では45年振りの大雪で各方面に大きな被害をもたらしたとの報道がなされました。そんな冬もそろそろ終わりを告げ春の足音がここ弘前にも聞こえつつあります。

今年は、2月のソチオリンピック、3月のソチパラリンピック、6月にはブラジルW杯サッカーが開催されるなどスポーツのビッグイヤーとなっています。また、大学改革面においても今年と来年は加速期間と位置付けられており、ビッグイヤーとなる気配が色濃い!?

今年の卒業式は、リニューアルオープンした弘前

市民会館が会場となります。スタッフとして携わる者としても楽しみなところです。

さて例年、この時期の「学園だより」は、卒業・修了・退職をメインテーマとしています。今年もたくさんの学生の皆さん、教職員の方がご寄稿くださいました。ありがとうございます。

弘大を去るにあたり様々な思いで、在学あるいは在職した期間を振り返っておられることでしょう。寄稿いただいた文面を拝見するに、十人十色の弘大への思いが切々とつづられているように思います。巣立っていく学生の皆さん、諸先輩方が築いてこられたこの弘大を、残った我々が更に発展させていくべく今後もお力添えをいただければ幸いです。

皆さまの今後のご活躍を祈念して筆を置きたいと思います。
(tsunek)

デポジット弁当容器の回収にご協力ください

弘前大学生協で販売している内製弁当の容器は、リサイクルできるようになっています。弁当販売時に容器代として10円をお預かりして、お弁当を食べ終わった後に容器を店舗にお持ちいただくと預かった10円を返金します。〔デポジット方式〕

お弁当容器の回収は、生協全店舗で行っています。食べ終わった弁当容器は店舗へお持ちください。リサイクルのご協力を、よろしくお願いいたします。

●平成23年～25年の取組比較 (各年とも3月～翌年1月までの累計比較)

	弁当容器の回収率 (%)
平成23年度	93.9%
平成24年度	84.9%
平成25年度	69.3%
回収増加率	▲ 15.6%

※研究室などで溜めている容器があれば、ぜひお持ちください。



弘前大学ご卒業をお喜び申し上げます

■生協出資金返還の手続きについて

ご卒業やご栄転などで弘前大学を後にする皆様に、これまでご出資していただいたこと、沢山ご利用いただきましたことを深く感謝いたします。現在生協では、出資金の返還手続きのご案内をしています。まだ手続きをされていない方は、お忘れのないようお願い申し上げます。また、院への進学などで、引き続き組合員としてご加入いただく場合も身分変更手続きが必要です。

- ① 店舗で「出資金返還&身分変更申込用紙」に記入し手続きをお願いいたします。
- ② 出資金返還は振込となります。5月末まで有効な金融機関口座を申込書にご記入下さい。
- ③ 3月末までの手続き者は、5月26日(月)付けでの振込による返還となります。

■弘前大学オリジナル 日本酒「弘前大学」

平成25年度の金木農場産米から醸造された「日本酒 弘前大学」の新酒が3月12日に発売されます。

柔らかくて、日本酒を初めて飲む方でも飲みやすいお酒です。とてもおいしいですので、これからのご活躍が期待される卒業生の皆様にも、いろいろな場面でご愛飲いただければ幸いです。



●日本酒「弘前大学」は下記店舗でお求めいただけます。
弘大生協サリジェ TEL 0172-34-4622



弘前大学 学園だより Vol.180

2014年3月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。

e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学学務部学生課

国立大学法人弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長

保田 宗良 (教育委員会)

委員

加藤 恵吉 (人文学部)

出 佳奈子 (教育学部)

松谷 秀哉 (医学研究科)

米内山 千賀子 (保健学研究科)

宮本 量 (理工学研究科)

栗田 大輔 (農学生命科学部)

澤田 祐子 (学生課)

粕谷 常好 (学生課)

印刷：やまと印刷株式会社

